

21. ALS コミュニケーション支援における保健医療専門職の観察の視点や重要度の違い 病院群、在宅群の比較から

高橋宏子、奥野ひろみ、五十嵐久人、山崎明美、石田史織（信州大学保健学科）

キーワード：ALS、コミュニケーション支援、情報収集、アセスメント、チームケア

要旨：ALSのコミュニケーション障害に対しては意思伝達が可能になるように保健医療福祉専門職のチームアプローチによる総合的な支援が重要であるが、専門職の関わりや支援する場の違いが予想される。観察の視点やその重要度の違いを明らかにすることを目的として、専門職にインタビュー調査を行った後、それを元にアンケート調査を行った。結果、コミュニケーションに関わる身体の動きのみならず、その他の身体状態や本人に関する項目、介護者家族に関する項目も重要視していたが、病院群に比して在宅群の平均値がより高かった。以上より、病院、在宅支援者間の情報交換・共有、検討がより重要になる。

A. 目的

ALS療養者のコミュニケーション支援に関わる保健医療専門職種種の観察の視点や情報収集項目、その重要度の違い、及び所属する機関による違いの有無を明らかにし、連携強化に繋がる基礎資料とすることを目的とした。

B. 方法

本調査は調査1、調査2に分けて行った。

① 調査1

ALS療養者支援の経験のある医師（Dr）、病棟看護師（Ns）、訪問看護師（訪問Ns）、理学療法士（PT）、作業療法士（OT）、言語聴覚士（ST）、保健師（PHN）計15名に半構成面接法によるインタビュー調査を行った。質問内容はコミュニケーションに関わる①身体の動きについて、②①以外の身体症状について、③その他の必要と思う情報について何をどう観ているか尋ねた。また許可を得てICVレコーダーに録音した。録音内容を文字化して逐語録にし、関連する記述を分類・抽出しながら整理した。

② 調査2

調査1より、4つの大項目（I群：コミュニケーションに関わる身体の動きに関する項目、II群：身体状態に関する項目、III群：その他の本人に関する項目、IV群：介護者家族に関する項目）及び30の中項目、137の小項目が分類・抽出され、これを用いてALS療養者の意思伝達状況を把握する上での重要な視点とその程度を「1」（全く重要でない）～「5」（非常に重要である）の5段階のうち、1つに回答を求める調査用紙を作成し、全国の難病医療拠点病院および神経内科の標榜のある国立病院154か所、訪問看護ステーション120か所、保健福祉事務所90か所を層化抽出法にて抽出し、そこに所属している、過去10年以内に

ALS療養者を2名以上担当した経験のあるDr、Ns、訪問Ns、PT、OT、ST、PHN計1500名を対象に自記式質問調査用紙を配布、郵送法にて回収した。

③ 検討方法

回答された5段階を得点化し、大項目、中項目の平均値を算出した。さらに所属別として、病院勤務しているDr、Ns、PT、OT、STを病院群、また訪問看護ステーションに勤務している訪問Ns、PT、OT、STおよび保健所に勤務しているPHNを在宅群の2群に分け、t検定を行った。また在宅群の専門職別は一元配置分散分析を行った。有意水準は5%とした。また統計処理はSPSSver22.0を使用した。

④ 調査1,2ともに信州大学医倫理委員会の承認を得た。

C. 結果

最終有効回答数445（回収率29.7%）を分析した。4の大項目別平均点はIV群が最も高く、III群、II群、I群の順であった。大項目と病院群、在宅群別の関係では、I～IV群いずれも有意差が見られ、どれも在宅群の平均値の方が有意に高かった（I群 $p=0.000$ 、II群 $p=0.003$ 、III群 $p=0.000$ 、IV群 $p=0.008$ ）。4の大項目と在宅群の職種別（訪問看護師、保健師、リハビリ職）の関係を見たところ、I群～IV群の平均値はどれもリハ職が高かった。30の中項目の比較では有意差が見られる項目があった。

D. 考察

在宅群の方がコミュニケーションに関わる身体の動きや身体状況のみでなく、介護に関する情報や本人の意向など、生活やQOLに関する情報を重要視していることが考えられた。

E. まとめ

病状の進行により、関わる専門職、機関が異なることが予想され、専門性を活かした情報交換・共有により病院、在宅の継続支援に生かすことが重要である。

F. 利益相反

利益相反ありません。